偏見をなくす

中央市立玉穂中学校三年　　松岡　つくし

私には、高校生の姉がいる。姉は、身体障害と知的障害を抱え、支援学校に通っている。このことを、知っている友達は一人しかいない。今まで、「お姉ちゃんって、どこの高校に通っているの。」と聞かれても、誤魔化してきた。私にとって、簡単に口にできる内容ではなかった。何より、本当のことを教えることが怖かったのだ。私は、母に姉のことを聞かれたら、どう答えれば良いのか聞いてみた。母は、平然とした顔で「そのまま言えばいいじゃん。」と言った。私は、驚きと戸惑いが隠せなかった。本当のことを話したら、周りはどう思うのだろう。私は、姉が「障がい者」というレッテルで見られることが嫌だった。

私は、「障がい者」という言葉を使いたくない。「障がい者」とは、心身に何らかの障害がある人のことだそうだ。私は、「障がい者」という言葉と一緒に、「かわいそうな人」「普通とは違う人」というイメージがついてくる人が多いのではないかと思う。障害を抱えている人が、常に悲しいわけではない。誰でも、悲しいことも、辛いことも、楽しいことも、うれしいこともある。人は皆、違うのだから普通の人なんていないと思う。

確かに、姉は障害を抱えているが、それだけが姉の全てではない。姉は歌が上手だ。また、苦手な勉強にも前向きに取り組んでいる。苦手なことも継続できる、真面目なところを、私は尊敬している。私にとって、生まれたときから姉は「姉」でしかなく、「障がい者」としてみたことはない。私は、友達に、姉を一人の「人」としてみて欲しい。そのため、姉が障害を抱えていることを簡単に言えないのだ。

私には、登下校のときによく、すれ違う人がいる。その人は、近所に住んでいて、小さい頃からの知り合いである。その人もまた、障害を抱えている。ある日、すれ違う際に歩く様子を見て、一緒にいた友達がその人を馬鹿にしたように笑った。別の友達は、その人が怖いと言った。私は、そのことが悔しくて悲しかった。友達は、その人のことを知らない。知った後でも、同じことが言えるのだろうか。もし、私が相手の立場だったら、どう思うだろう。そう考えると、心が痛んだ。障害のある人が不用意に傷つけられていることが、世の中にはあふれているのではないかと思う。そして、それは無意識に傷つけているのではないかと思った。人を外見やイメージで判断することは良くない。それ

は、障害に関わらず、誰にでも当てはまることだと思う。

私は、中学二年生のときに苦手な人と同じクラスになった。それまでに関わったことはなかったけれど、イメージやうわさから苦手だと決めつけていた。しかし、実際に関わってみると、優しくて面白い子で、すぐに好きになった。私も、無意識に、偏見で人をみてしまっていたのだ。イメージやうわさは、必ずしも事実とは限らないことを痛感し、反省した。イメージやうわさではなく、実際に関わって判断することが大切だと気付いた。

障害を抱える人は、周りのサポートが必要不可欠だ。家族、友達、近所の人・・・・・・。少しでもその輪が広がれば障害を抱える人は生きやすくなると思う。私の姉も、多くの人に支えられてきた。親戚、友達、学校の先生、病院の先生、近所の方々。皆、親切で姉のことを真剣に考えてくれていた。学校の先生の中には、姉が卒業した後でも、「お姉ちゃん、元気？」と声をかけてくださる方もいる。姉が、周りの人に支えられていることを実感して、私もうれしくなる。多くの人が、サポートの輪にいてくれることが心強かった。

障害を抱える人にとって、周囲の人はとても大切な存在だ。だからこそ、障害に対して偏見を抱える人が少なくなることが大事だと思う。私は、これまで偏見を恐れて、姉のことを隠してきた。まずは、私が堂々とすること。周りの目を気にせず、偏見にも向き合わないと周りの考えを変えることはできない。一人でも多くの人が、障害を抱える人に対して関心を持ち、助け合える関係を築いていきたい。偏見は差別の始まりだと思う。無意識な偏見に気が付いて、誰もが幸せだと思える未来をつくっていきたい。